



岡本侑也 (2024.3.10) © ヒダキトモコ

## ベルチャ・クアルテット

多様性の彼方に 長木誠司

## 周防亮介 (ヴァイオリン)

### イザイ 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ全曲

いよいよ来た! 周防のイザイ・ソナタ全曲 渡辺和彦

## 辻 彩奈 (ヴァイオリン) & 阪田知樹 (ピアノ)

デュオたるべきデュオ 原口啓太

[ Schedule 2024.5~8 ]

[ Information ]

2024/2025シーズン主催公演ラインナップ発表!

ランチタイムコンサート Vol.128 山縣美季 (ピアノ)

久保田 巧 ヴァイオリンは歌う Vol.4

# BELCEA QUARTET

Corina Belcea  
Suyeon Kang  
Krzysztof Chorzelski  
Antoine Lederlin



## ベルチャ・クアルテット——多様性の彼方に 長木誠司

2021年の来日が、コロナ禍での厳しい入国制限のなかで延期となったが、翌2022年にベルチャ・クアルテットはさっそく再来日を果たした。そのときに演奏したのがベートーヴェンの弦楽四重奏曲第7番 へ長調 Op.59-1《ラズモフスキー第1番》とシューベルトの弦楽四重奏曲第14番 二短調 D810《死と乙女》であった。まさに大曲が2曲。ようやくいろいろな団体の来日が可能になってきた時期とは言え、彼らの音楽はしばらく絶えていたライブという一期一会の緊張が何であったかをまざまざと見せつけてくれた。それはこと演奏会に関しては、まったくもって劣化していた時間を一挙に取り戻すかのような鮮烈な驚きに満ちた、いや驚きそのものを取り戻してくれた絶好の機会となった。

ルーマニア出身のコリーナ・ベルチャとポーランド出身のクシチュフ・ホジェルスキーが中心となって、このクアルテットが英国王立音楽大学で結成されたのが1994年。ということは、今年は結成30年になるという、すでに超ヴェテランの団体なのであるが、コロナの空白期間を考慮に入れても、もうそんなに経ってしまうのかという感慨を禁じ得ない。もちろん、この間、上記の中心となった2名以外は、たびたびメンバーの

交替を経験してきた。実際、2022年にはフランス出身のアクセル・シャハーだった第2ヴァイオリンが、2年の間に交替し、今回は韓国系オーストラリア人のカン・スヨンになっている。シャハーもソロ経験とアンサンブル経験の豊富なひとだったが、現在のカンもソリストとして活躍しながら、これまで多くの小さな室内楽のメンバーとして、そしてアンサンブルのコンサートマスターとしてキャリアを積んできている、その意味では強者だ。

もっとも、ベルチャ・クアルテットの演奏は、これまでの多くの録音を聴く限り、そして来日での演奏を聴く限り、メンバーの交替によるスタイルの変更は感じられない。おそらくは団体名を冠しているベルチャの意志が演奏に強く反映しているのだろう。もちろん、音楽は、そして演奏は水ものだとも言えるから、今回もまた変わらないスタイルを護っていると思いたいとは言え、まったく変化がないのかどうかは実際に耳で確かめてみるほかはない。そのためには、彼らが長らくレパートリーの中心としてきたベートーヴェンの作品を試金石にするのがいいと思うが、シャハー時代に2度目の全曲録音を果たしたブリテンの弦楽四重奏曲が1曲（第3番）、カンに入れ替わって演奏されるので、それを手がかりとしてみるのもいいだろう。

それにしても、この団体はこれまで常に国際色豊かなメンバーで成り立っており、まさに多様性の時代の申し子のようなところがある。西洋古典音楽のひとつの純粋な核をなすと言っても過言ではない弦楽四重奏という編成は、かつては出身地の国や街が同じ、あるいはふだんの生活空間が同じ、過ごしてきた境遇が同じ、果ては兄弟姉妹というように、なんらかの地域的・

文化的・伝統的・血筋的な共通要素があつてこそ、お互いの心や仕事や考え方や音楽観や芸術への興味を一致させ、拳動を隅から隅まで知悉でき、まさに4人でひとつの楽器のように一体化できるようなイメージがあつた。

でも、もうそんな時代ではないのだろう。西洋音楽が西洋人のものでなくなってすでに1世紀以上。世界は東も西も、南も北もなくなってきた。あいかわらず存在するのは戦争だが、音楽はそうしたひととひととの、あるいは民族と民族との、宗教と宗教との間にある確執を常に無くすところに存在意義を求めてきた。その理想のひとつの極致にあるのが弦楽四重奏だとすると、そこでベルチャのような「多様性」を標榜する、いやそれに固執すると言ってもよい団体は、まさに新しい時代の音楽の、あるいは「世界」の可能性を主張していると言ってもよい。彼らの演奏スタイルは、この「多様性」に大いに影響されていると思うが、その際、これまでの演奏様式にもっとも寄り添いながら、それをはるかに微細に、フレーズのはしばしにまで神経を行き届かせながら、大きなスケール感のなかであらたな局面へと押し進めたのがベートーヴェンやシューベルト演奏だと思う。バルトークやドビュッシー、ラヴェルは、表情の濃さが非常に个性的であるように感じられる。やはり、弦楽四重奏というジャンルを、芸術的な高みにまで初めて持ち上げた、ウィーンのふたりの存在は大きすぎるのかも知れない。それとは裏腹に、ブリテンの作品に対しては、2回も全曲録音を果たした彼らがそもそもひとつの伝統を作ってしまったように思う。

前回のシューベルトに代わり、今回のトッパンホールでの曲目には、ブリテンが入っている。ベルチャが高めた伝統と、彼らが創り上げた伝統、その両者確かめる機会が、もうそこまで迫っている。

(ちょうき・せいじ/音楽評論家)



トッパンホール初登場の2022年10月公演より

### ベルチャ・クアルテット

2024年6月28日(金) 19:00

コリーナ・ベルチャ、カン・スヨン(ヴァイオリン)

クシチュフ・ホジェルスキー(ヴァイオリン)

アントワヌ・レデルラン(チェロ)

ベートーヴェン:弦楽四重奏曲第4番 へ長調 Op.18-4

ブリテン:弦楽四重奏曲第3番 Op.94

ベートーヴェン:弦楽四重奏曲第12番 変ホ長調 Op.127

7,000円/U-25 3,500円 全席指定

特別協賛:株式会社 安藤・間

Ryosuke Suho

Ysaie  
Sonatas for Violin Soloいよいよ来た！ 周防亮介のイザイ・ソナタ全曲  
渡辺和彦

周防亮介の存在を初めて知ったのは、第9回東京音楽コンクール(2011年)本選で1位となった際のチャイコフスキーの協奏曲演奏だった。この時は聴衆賞も受賞。テクニックが本当に安定した、音のきれいな、現代のチャイコフスキーだった。

その後、めぐろパーシモンホールでのリサイタル(2015年1月18日)、東京オペラシティでの無伴奏「B→C」(2017年11月14日)、トッパンホールでの「パガニーニ&シャリーノ」(2021年8月6日)などを聴いた。今は閉鎖中のJホールでの演奏もあり、終演後に本人とあれこれ雑談したのも懐かしい。2012年頃だったと記憶する。

2021年トッパンでの無伴奏リサイタルは、パガニーニ24曲とシャリーノ6曲の計30曲「カプリース」を一晩で、しかも独自の配列に入れ替え再構成するというイリア・グリーンゴルトツバリの事をやってのけた。トッパンにはその後もアンサンブル演奏その他で何度も出演。全て聴いたかもしれない。「聴きこぼし」があったとすれば残念だ。

最近の周防は大ホールをほぼ満席にしてのパガニーニ《24のカプリース》再演(2023年1月29日、サントリーホール)のほか、演奏順にブラームス、メンデルスゾーン、チャイコフスキーの「3大協奏曲」を1回の演奏会で弾いてしまう仰天企画(2023年6月3日、東京文化会館)と、ついこの間終わったばかりの「3大」の続編(2024年4月4日、サン

トリーホール。曲は順にパガニーニの第1番、ブルッフ第1番、シベリウス)など、若くなければ絶対に出来ないだろう大胆な演奏会を続けている。「3大」は2度とも《ツィゴイネルワイゼン》《ツィガース》《タイスの瞑想曲》を本編に組み込む(初回)、または《ツィゴイネルワイゼン》をアンコール演奏する(2回目)など、ほとんど「3.5大」に近い形。体力、気力も凄いが、サービス精神も半端でない。この勢いを体験すると、続々編も有り得ると期待してしまう。まだラロやサン=サーンス、バルトーク、そして何よりもベートーヴェンが残っている。

その周防が「イザイのソナタ」全6曲をやはり一晩で演奏する。思えばイザイのソナタ全6曲がこれほど頻りに舞台演奏されるようになるうとは、20世紀中は想像できなかった。存在そのものは有名だった。しかしそれは、少しだけ気難しいプロフェッショナルなヴァイオリニストが「第3番」を時おり披露して聴き手をびっくりさせる、という意味に過ぎず、残る5曲を含めた6曲全てが、バッハやパガニーニ、バルトーク作品と並ぶ重要無伴奏ヴァイオリン作品に「出世」することは予想出来なかった。それが今では「イザイ6曲を一晩で全部」は珍しくなくなった。これまでの周防亮介を少しは知っている者としては、「いよいよ来たな」と思ってしまう。

周防亮介のヴァイオリン演奏の魅力はどこにあるのか。まずは企画

力とそれを実行する確実な能力だろう。「B→C」は質・量ともにてんこ盛りプログラムに驚き「本当にこれ、出来るのか」と心配した。シュニトケ《ア・パガニーニ》でスタートしてバルトーク無伴奏、コン、バッハのBWV1005、イザイの5番。後半少し「息切れしたかな」と思わせてアンコールでは、私が長く楽譜のみ所有して実際の音は録音も含めて聴いたことが無かったルジェロ・リッチ編曲によるタレガ《アルハンブラの思い出》のトレモロが密かに静かに鳴り始めた。これには本当に驚いた。この曲はその後、海外アーティストの来日公演も含めて「無伴奏」アンコールの準定番曲になってきた。コン・イサンの《大王の主題》(1976)も同じ。バッハ《音楽の捧げもの》の例のフリードリヒ大王による意地悪な?主題を用いた演奏譜41段、8分弱(当日の周防の演奏)の変奏曲。部分的に12音を持ち出す知的な作品はこの時初めて知った。後日慌てて楽譜を発注。20日後に届いたプーギー&ホークス版を眺めて「これをあのように楽々と弾いたか」とため息をついた。

「6大協奏曲」の時もそうだったが、周防亮介の演奏は音のテンションの高さで勝負するというより、細かい強弱のニュアンスや音色のほうにむしろ自己を託すという、最近では少し珍しいタイプに属する。少なくとも私にはそう思われる。それを安定した技巧の正確さが下支えている。大音量とハイテンションな質感で強く迫ってくるヴァイオリニストは魅力的ながら、探せば見つかる。しかし周防亮介のような知的好奇心を揺さぶり、大胆企画で驚かせ、ファッションも彼ならではの、それらを全て含めた上で、有名曲のちょっとした箇所に(珍曲の中にも?)誰もしていない強弱の表情や音色のニュアンスを盛り込んで自己を主張する、そのような若いヴァイオリニストはいない。

かつての珍曲、今は準定番となったイザイの6曲。あの周防亮介はどう演奏するのか。今から楽しみにしている。

(わたなべ・かずひこ/音楽評論家)



2023年3月の無伴奏公演から

周防亮介(ヴァイオリン)  
イザイ 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ全曲

2024年8月8日(木) 19:00

イザイ: 無伴奏ヴァイオリン・ソナタ Op.27  
第1番 ト短調/第2番 イ短調/第3番 ニ短調  
第4番 ホ短調/第5番 ト長調/第6番 ホ長調

5,000円/U-25 2,500円 全席指定  
特別協賛: 東急建設株式会社

[辻 彩奈&阪田知樹/周防亮介/谷 昂登&水野優也(8/20)]  
セット券発売中 | 12,900円

## デュオたるべきデュオ

同じ2016年、辻彩奈がモントリオール国際で、阪田知樹がリスト国際コンクールで第1位を獲得。ふたりの名前は一躍クラシック界で知られるようになった。その後のコロナ禍で、もちろん彼らにもさまざまな苦労はあったはずだが、来日できない演奏家の代役機会が増えて目覚ましいほどに飛躍したのもこのふたりだ。

トッパンホールにデュオとして初登場したのは、2022年7月。シュニトケにシューベルト、パレエ《ブルチネラ》を編曲したストラヴィンスキーのイタリア組曲で前半を盛り上げ、陰鬱な内容ながら劇的なスケルトンとクライマックスを持つショスタコーヴィチのソナタで締めくくった。そしてアンコールに可憐なパラダイスのシチリアーノ。そのコンサートは、当時まだ共に20代だった若手のデュオとは思えないほど、バラエティと迫力に満ちた、記憶に残るものだった。

極めて知性的、美しく透徹した響きを持つ阪田知樹の安定したピアノと、テクニックは切れつつ感情をためらうことなく表現する辻彩奈のヴァイオリンとが、見事なバランスでそれぞれの作曲家の世界を味わわせてくれた。音楽家としてのタイプははっきり違う。だが、お互

## 原口啓太

いを見事に補完するような新鮮でエキサイティングなデュオが誕生した。デュオたる必然性のあるデュオだ。

このデュオは即席ではない。2022年には10箇所まで全国ツアーを敢行。名古屋生まれの阪田と岐阜生まれの辻の“東海コンビ”は、今年春から夏にも各地で数公演を予定している。プログラムをあらためて眺めると、少しずつ違っている。何たる貪欲さ！オール・ブラームスやシューマンといった王道ソナタから、誰もが知る小品を弾いたり、トッパンと宗次ホールならではの通好みのプログラムまで、もうふたり自身がふたりのデュオを楽しんでいるとしか思えない。

「どんな楽曲に対しても自然体で音楽に向き合っているところがとても魅力的なヴァイオリニストだと思います」というのが阪田の辻評。「私が大枠的に音楽を捉えて弾くタイプなのに対して、阪田さんは考えに考えて緻密な音楽作りをしてくるタイプ。彼の緻密な音楽作りがあってこそ、私が自由に音楽をさせてもらっていると感じています」と辻は言う。

さて、トッパンのプログラムだが、シマノフスキの《神話》はこの

デュオでは初披露ということだ。ピアノも重要な役割を果たす難曲だが、阪田の複雑な和声であればあるほど物をいう緻密な楽曲分析、辻の本能のような描写力と色彩感にはびったりで、このデュオの十八番になりうる曲だ。

そしてフランスもの2曲は、レジス・パスキエに師事した辻が徹底的に仕込まれたもの。

第2楽章ブルースで名高いラヴェルの晩年のソナタ。「ジャズの中にも、どこか物憂げなところが感じられるヴァイオリンの美しいメロディがいいですね。第3楽章は無窮動、技術的にも曲想的にも華やかに高揚していくところが聴きどころです」と言う辻の技巧に圧倒されるだろう。

ショーソンの《詩曲》は彼女の代名詞のような曲。「愛にあふれた曲です。人の愛情や嫉妬、感情の変化がダイレクトに感じられる、情熱的な世界観の作品です」

阪田は彼らしい言葉で曲を語る。「たとえばワーグナーの《トリスタンとイゾルデ》といった音楽が根幹にあります。作曲のインスピレーションとなった、ツルゲーネフの小説が男女の愛のもつれですから」

そしてデュオ王道の《雨の歌》。「大好きな作品です。第1楽章の至福に満ちたメロディ、第2楽章のうちに秘めた情熱、第3楽章の寂しげな雨の歌……好きなところは語り尽くせません」(辻)

「ブラームスの3曲のソナタ中、最も美しい曲。常に高貴で、優しく、しかし、どこか儚さや物悲しさを感じさせます。トッパンホールの美しい音響にぴったりの楽曲だと思います」(阪田)

トッパンホールでは初披露のブラームスで、誰もが「このデュオは本物！」と納得させられるに違いない。

(はらぐち・けいた/音楽ジャーナリスト)

## 辻 彩奈(ヴァイオリン)&amp;阪田知樹(ピアノ)

2024年7月19日(金) 19:00

シマノフスキ: 神話 Op.30  
ラヴェル: ヴァイオリン・ソナタ  
ショーソン: 詩曲 Op.25  
ブラームス: ヴァイオリン・ソナタ第1番 ト長調 Op.78《雨の歌》

5,000円/U-25 2,500円 全席指定  
特別協賛: 株式会社 竹中工務店

## Ayana Tsuji &amp; Tomoki Sakata



Table with columns: 日時, 公演. Includes dates like 5/22, 5/24, 6/30, 6/28, 7/19 and performers like 山縣美季, ベルチャ・カルテット, 辻彩奈 & 阪田知樹.

Table with columns: 日時, 公演. Includes dates like 8/8, 8/20, 6/11 and performers like 周防亮介, 谷昂登 & 水野優也, Vol.128 山縣美季.

最新情報はオフィシャルWEBサイトでのご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます www.toppanhall.com

INFORMATION

2024/2025 主催公演ラインナップ 発表!



25周年を見据えた力のこもった企画が目白押しの2024/25シーズン主催。アンドレアス・シュタイアー プロジェクト (2公演)、パトリツィア・コパチンスカヤ&カメラータ・ベルン (2公演) には始まり、エベヌ弦楽四重奏団とベルチャ・カルテットの3夜連続公演など、来たるシーズンも、心躍る顔ぶれが続々登場します!

注目の若手、飛翔を期すステージ



新しい才能との出会いが楽しめるトップホールの〈ランチタイムコンサート〉。フレッシュな若手アーティストの真剣勝負をお届けしている本シリーズが、6月にスポットを当てるのは、ピアノの山縣美季。第89回日本音楽コンクール優勝をはじめ、数々のコンクールで高い評価を受けている若き実力者です。トップホールへは、昨年のジャン・クロード・ベヌティエの公開マスタークラスに出演。この4月も受講予定でしたが叶わず、代わって特別企画《ベヌティエに愛をこめて》に豪華メンバーとともに名を連ねました。そこでの経験を糧に、自身が主役となって挑む、今回の〈ランチタイムコンサート〉。プログラムは、想い入れがひととき強いショパンの作品から《24の前奏曲》を選曲。ショパンの音楽のエッセンスが凝縮された曲集が、山縣のイメージを通して、さらに美しく立ち昇る演奏に期待が高まります。

以前から〈ランチタイムコンサート〉への出演を願っていたという、山縣の晴れ舞台。注目のステージに、どうぞお運びください。

〈ランチタイムコンサート Vol.128〉 山縣美季(ピアノ) ほの暗き雨の中で 2024年6月11日(火) 12:15 ショパン: 24の前奏曲 Op.28 入場無料(要予約/お一人様2席まで) 受付期間: 2024/4/30(火)～5/21(火) お申し込み方法: ハガキ(抽選制・当選者のみ通知) 〒112-0005 東京都文京区水道1-3-3 トップホールチケットセンター「ランチタイムコンサート Vol.128」受付係 (住所、氏名(フリガナ)、電話番号、希望席数を明記ください。)

Table with columns: 2024年, 公演名, 日時, ステータス. Lists events like 'トップホール24周年 2024/25シーズン オープニングコンサート' and 'アンドレアス・シュタイアー プロジェクト13'.

Table with columns: 2025年, 公演名, 日時, ステータス. Lists events like 'トップホール ニューイヤーコンサート 2025' and 'トリアリズ Vol.4'.

※発売日は変更になる可能性があります。記載の発売日は単券の一般発売日です。 ※★印はセット券をご用意しています。 ※最新情報はオフィシャルWEBサイトをご確認ください。

“歌う楽器”の魅力あふれる至福のひととき



2021年にスタートした「久保田巧(ヴァイオリンは歌う)」も早4回目。その確かな実力とプログラミングの面白さで、歌う楽器としてのヴァイオリンの魅力に、様々な角度からアプローチして、新たな発見の喜びに導いてくれます。

久保田自身が「やりたいこと」を定期的に発信していく機会となっているこのシリーズ。スタートは長く住んだゆかりの地《ウィーン》をテーマに、ウィーン音楽の真髄と面白さを「ヴィーナリッシュ(まさにウィーン風)」なアプローチで聴かせ、聴衆を沸かせました。続く今回は《オペラ》をテーマに掲げ、《椿姫》の抜粋と《カルメン》にまつわる様々な曲にチャレンジ、新鮮な驚きに満ちた公演となりました。そして今回、「この作品を知らずしてチャイコンを弾くな」と、あのロシアの名ヴァイオリニストに言わしめた《エフゲニー・オネーギン》の名アリアと、まるでオペラ・アリアのようなヴァイオリン曲《

想曲》を対比させるなど、これまで以上に切れ味鋭いアプローチが感じられます。オペラを知り尽くした河原忠之の彩り豊かなピアノも必聴です。どうぞお聴き逃しなく。

久保田 巧 ヴァイオリンは歌う Vol.4 続・オペラの愉しみ 2024年6月16日(日) 15:00 河原忠之(ピアノ) ウェーバー: オペラ《魔弾の射手》Op.77より アガーテのアリア(まどろみが近寄るように...静かに、清らかな) チャイコフスキー: オペラ《エフゲニー・オネーギン》Op.24より 《手紙のアリア》 チャイコフスキー: 《なつかしい土地の思い出》より 《幻想曲》Op.42-1 チャイコフスキー: ワルツ・スケルツォ ハ長調 Op.34 ほか 全席指定: 5,500円 主催: KAJIMOTO お問い合わせ: カジモト・イープラス 050-3185-6728 チケットのお申し込み: トップホールチケットセンター

表紙: 岡本侑也

今年初め、トップホールで数々のチャレンジングな企画に挑み続けてきた岡本侑也が、世界最高峰カルテットのひとつ、エベヌ弦楽四重奏団に加入のビッグニュースが飛び込んできました。その話題の渦中の無伴奏は、当面カルテットに主軸を置くという岡本の、ターニングポイントとも言うべき貴重なステージに。次回の登場は来年3月。エベヌ弦楽四重奏団です!

編集後記

一斉に咲き誇った桜が舞い散ったあとは、いよいよ新緑の季節。撮影したの今号の表紙・岡本侑也さんの姿を芽吹き勢いに重ねながら、音楽界の行く先に眩しい想像をめぐらせています。春先は、私たちもご縁をいただいていた小澤征爾さん、ポリニさんなど巨星墜つるニュー

スが相次ぎ、一時代を築いたアーティストを見送って胸さぐ思いをしましたが、昨今、バトンを受ける若者たちの頼もしさは力強い限り。現在23歳のトップホールも、さらに意欲をたぎらせて歩み続けます。プレ25周年となる2024/25シーズンも、ぜひご期待ください。(ふ)